

学校教育目標	「自ら学び、心豊かでたくましく、未来を切り拓く三谷っ子の育成」										
・めざす子ども像	みずから学び、自分の言葉で表現する子 たくましい体を持つ子 にごこに笑顔で、思いやりのある子 こきょうを大切にしている子										

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	判定結果	成果と課題	対 策
①教育課程・学習指導	児童一人一人に基礎的・基本的な知識と技能の習得を図り、自分の言葉で自分の思いを表現する力を育成する。	書く活動を各教科の授業に意図的に取り入れ、相手を意識して自分の考えを伝えたり、表現したりする力の向上を図る。	教務主任	昨年度より「書く」活動を意識して学習に取り入れてきたが、「書く」力にはまだまだ個人差が見られる。相手意識をもって、分かりやすく伝える力を育てる必要がある。	【成果指標】 各教科やげんきの時間の課題やふり返り、自分の考えやまとめた事柄を相手に伝えるように、条件に沿って文章に表すことができる。	各教科において目的や条件に合わせて書く活動を意図的に設定できた教員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、個別指導や補充学習を行い、指導内容を改善する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	各教科の授業や道徳、総合的な学習の時間、学校行事のふり返り等の場面に書く活動を意識して取り入れ、児童の書く力の向上を目指した取組を行うことができた。しかし、書く力にはどの学年でも個人差が見られ、個別の支援や指導の必要性をより一層感じられるようになった。	書く力のスキルを高めるために、モデルを示したり、手本となる文例を紹介したりしながら、今後も書く機会を意識して設定していく。また、めあてを明確にし、一人一人の実態に沿った支援、指導を継続していく。
	国語科を中心に、児童が主体的・協働的に課題を解決する学びのプロセスを重視した授業改善に努め、今求められている学力の育成を図る。	学び合いの場における教師の関わり方の工夫や思考ツールの活用、振り返りの工夫に重点を置いた研究授業を全教員が実践する。	研究主任	児童の主体的に学び合う姿は徐々に育ってきているが、学び合いの場における教師の関わり方や、ねらいや児童の実態に応じた思考ツールの活用等について工夫していかなければならない。	【努力指標】 国語科を中心に、児童が主体的・協働的に課題を解決できるような授業を実践できる。	児童が主体的・協働的に課題を解決していく授業を実践できた教員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は、研究先進校の取り組みなどをもとに、指導法や取り組みの内容を改善する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	児童が主体的・協働的に課題を解決していく授業を、全教員が意識して実践できた。また、国語科を中心に、授業のねらいに合った思考ツールを活用していくこととする意識も高まり、必要に応じて思考ツールをアレンジして活用することができた。しかし、学び合いの質という点では課題も多く、今後質の向上を目指して、学校研究を深めていく必要がある。	学び合いの場における目指す姿を具体的に明らかにし、教師と児童が共有した上で学び合いの質の向上を目指す。また、来年度の研究自主発表に向け、研究の方向性を共通理解し、組織的・継続的な学校研究になるよう努めていく。
	読書習慣を確立し、読書内容の質の向上を図る。	「朝の読書」「読書ノート」を継続して取り組む。個人の力に応じた個別指導を行う。「おすすめの本カード」等の活動を通して、必読書「宝石シリーズ」の目標冊数達成をめざす。	図書館指導担当	読書量は確保できているが、学年相応の本を手にとらない傾向があり、読書の質の低下につながりかねない。質の向上を図るために、「宝石シリーズ」の目標冊数達成を目指していく。	【成果指標】 「読書ノート」に記録したり、「おすすめの本カード」等からヒトを得たりして、「宝石シリーズ」の学年の目標冊数を達成する。	「宝石シリーズ」の学年目標冊数を達成することができた児童の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの方法を再検討する。	毎月の読書ノートや宝石シリーズ達成表で進捗具合をチェックし、全体や個別に働きかける。	A	2学期の読書週間には、児童が2枚ずつ書いた「おすすめの読書」を掲示することができた。「宝石シリーズ」の学年毎の目標を達成することは児童によっては難しいと思われるが、担任の働きかけや「並行読書」も宝石シリーズに加えることによって、全校児童が達成することができた。	朝読書、家庭読書の日、読み聞かせ、読書ノートなどの取り組みを行うことで、読書に親しむ習慣はついてきている。さらに、読書の質と量の向上に向けて取り組んでいく。
②生徒指導	場に応じた気持ちのよいあいさつや言葉遣いの習慣化を図ること、よりよい人間関係を育成する。	児童会のあいさつ運動、児童会集会、たてわり活動、運動会等行事で意識を高め、日頃の生活で活かすことができる。	生徒指導主事	休み時間など日頃から異学年と仲良く遊んでいる姿が見られる。しかし、あいさつが自分からできない児童や、強い言葉遣いをする児童も見られる。	【成果指標】 場に応じた気持ちのよいあいさつや言葉遣いをする事ができる。	自分から進んで気持ちのよいあいさつができた児童の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	7・12月に児童を対象にアンケートを実施する。	B	教員、保護者の呼びかけだけでなく、児童会のあいさつ運動や5年生の国語科の提案等児童から気持ちの良いあいさつを呼びかけたが、まだ何人か小さい声でしかあいさつができない児童がいる。	今後もあいさつ運動は粘り強く継続して取り組んでいく必要がある。また小さい声でしかあいさつができない児童に対しては大きな声で挨拶ができるよう保護者と連携して取り組んでいく。
	全教職員が日常的に児童理解に努め、いじめ・不登校の未然防止や早期発見、発生した際の迅速かつ適切な情報共有、組織的な対応を図る。	月に1度児童理解の会を開き、児童の情報共有する。学校生活アンケートやQ-Uアンケートをもとに児童と面談し、児童の実態把握を図る。いじめ・不登校が発生した場合は、対策チームで組織的に対応する。	生徒指導主事	特に気になる問題は無いが、友達同士の小さなトラブルが起こることがある。また、複式学級や少人数学級のための人間関係が固定しがちである。	【努力指標】 児童理解に努め、適切な情報共有をし、組織的に対応することができる。	児童理解に努め、適切な情報共有をした教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	7・12月に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	全教員で生徒指導の3機能を生かした学級づくり、授業づくりに取り組んできた。その結果児童は安心して自分の意見が発表できる環境を整えることができた。話し合いの場面では自分の意見を積極的に述べることができるようになり、自己肯定感も高めることができた。	今後も全教科の授業の中で話し合いの場面を設定し、この取り組みを継続していく。
③進路指導・キャリア教育	よりよい人間関係を築きながら、夢や希望をもって努力し、意欲を持って学び続ける児童を育成する。	自分の周りにいる人々に積極的に関わることで、自他の良さを認め合い、ともに高め合うとする態度を育成する。	教頭	明るく素直であり、小規模校のため、異学年、男女を問わず仲が良いが、お互いに切磋琢磨し、高め合う場面が少ない。	【努力指標】 自分の良さを見つけるとともに、友達の良いところを見つけ助け合えることができる。	自分のことだけでなく、友達のこと大切にしてと思った児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	7月、12月に児童を対象にアンケートを実施する。	A	2学期に「友だち集会」「人権集会」を開催して、よりよい人間関係が構築できるよう取り組んできた。その結果、児童アンケートではほとんどの児童が友達のことを考えるようになってきた。今後は発達段階に応じて、互いに切磋琢磨し、高め合う真の友情について理解させていきたい。	3学期の普段の授業や児童会集会、卒業に向けての各行事などを通じて、周りの人に対する感謝の気持ちや、協力して作り上げることの喜び、大切さを体験させながら、真の友情について理解させたい。
④安全管理	危機管理意識を高め、防災教育の充実を図り、安心安全な学校づくりをする。	事故や自然災害など想定外の事態に備え、的確な行動がとれるように教職員の研修や訓練を推進していく。	教頭	年3回の避難訓練では様々な場面を想定して実施した。児童は教師の指示をよく聞き、迅速に避難することができた。今年度は事故や自然災害など想定外の事態に対しても自分の身を守るような児童に育てたい。	【成果指標】 さまざまな災害時や不審者等に遭ったとき自分で自分の身を守る児童に育てる。	さまざまな避難訓練によって非常時の際自分で自分の身を守ることでできる児童の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	避難訓練終了時に振り返りを実施する。	A	児童は避難訓練の際、静かに迅速に避難でき、自分で自分の身を守る意識が定着している。またJアラート受信に対する避難方法についても共通理解することができた。今後は休み時間や、登下校時に発生した事故、自然災害等に対する避難についても訓練を行っていきたい。	来年度は休み時間を対象にしたものや予告せずに実施する避難訓練を実施したり、登下校時の避難の仕方について指導を行っていきたい。
⑤保健管理	児童の健康増進に向けた運動の習慣化を図り、バランスの良い体力の向上を目指す。	体育科では、第1回の体力テストの結果を分析し、担当学年の体力テストで弱い項目を意識した体づくり運動を取り入れる。さらにスポチャレ、体育的行事を通して、児童の運動機会を確保し、体力の向上を図る。	体育担当	休み時間には体を動かして遊ぶ児童が多く、運動が習慣化している児童が多い。体力のバランスが悪い傾向にあり、体力の個人差も大きい。	【成果指標】 年間2回体力テストを実施し、2回目の体力テストにおいて、各体力要素48項目中38項目(8割)以上H28年度の県平均記録の突破を目指す。	10月の体力テストにおいて、各体力要素48項目中、H28年度県平均記録を突破した項目の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	6月と10月に体力テストを実施する。	A	2回目の体力テストにおいて、各体力要素48項目中41項目で、H28年度新体力テストの県平均を突破することができた。(突破率85%)しかし、持久力や敏捷性などほとんどの体力要素は確実に高まったものの、柔軟性は全体的に低いため、体力のバランスは依然として悪い傾向にある。	体育科の授業において、柔軟性を高めるための体ほぐし運動を意図的に設定してきたが、定期的に柔軟性を高めることは難しいため、今後も継続して取り組んでいく。
	児童一人一人の健康に対する自己管理能力を高め、基本的な生活習慣の定着を図る。	保健指導や保健の学習を通して、児童の基本的な生活習慣に対する意識を高め、健康生活チェック等を活用して、児童の生活習慣の把握、指導改善につなげる。	養護教諭	健康生活チェックから特に高学年の就寝時刻が遅く睡眠時間が足りない児童がみられる。	【成果指標】 児童が健康生活チェック等の取り組みを通じて、基本的な生活習慣が身につく。自己管理能力を高めることができる。	健康生活チェック(7項目)においてOの合計が全体の8割に達成することができた児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	学期末に健康生活チェックを集計する。	A	2学期は「睡眠」をテーマとした学校保健委員会を開催し、睡眠や健康について学習したことが行動につながるよう、生活ががんばりカードを実施した。その結果、2学期末の健康生活チェックの集計結果において、80%以上の児童が、7項目のOの合計が全体の8割に達成していた。しかし、依然として早寝早起きに課題がある児童が数名みられる。	健康生活チェックを集計し、児童の実態を把握しながら、基本的な生活習慣の定着に向け、家庭とも連携して取り組んでいく。
⑥特別支援教育	気になる児童への校内支援体制の定着と継続を図り、児童の特性理解のための研修を深める。	個に応じた支援を行うために、専門相談派遣等を活用し、合理的配慮の理解と児童の支援の工夫に関する研修を実施する。	特別支援教育コーディネーター	全教職員で児童の特性を共通理解し、児童の指導に当たっているが、指導法の工夫やスキルを学び、一人一人の特性に適した支援に活用したい。	【努力指標】 合理的配慮の理解に向けての研修会を実施し、児童への支援に活かすことができる。	特別支援教育研修会を通して合理的配慮への理解を深め、個に応じた支援に努めた教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	専門相談員派遣の有効な活用や校内研修会の実施等、特性理解や合理的配慮についての理解を深め、s教職員が共通理解して指導に当たることができた。専門相談員の確かなアドバイスを活かして、学習指導や生徒指導の充実を図ることができた。	個に応じた支援を大切に授業づくりを今後も継続していく。専門的な見地からの最新情報を学び、個に応じた指導法や関わり方の工夫を意識して指導に当たる。
⑦組織運営	組織的な学校運営に努め、学校評価を機能させ改善に活用する。	学校評価の年間計画に基づき、効率よく仕事ができるようにPDCAサイクルで改善点を明確にし、改善していく。	教頭	各学期末にアンケート調査を実施して学校評価に活用している。今後も効率よく仕事ができるように会議の内容の見直しや各分掌のファイルの整理や文書の管理を行い事務処理の短縮を図っていく。	【努力指標】 学校評価の年間計画に基づきPDCAサイクルを踏まえながら常に改善に取り組む。その中で組織的・効率的な学校運営に努める。	組織的・効率的な学校運営に努めることができたと感じる教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	各主任、分掌担当が互いに協力して組織的、効率的な学校運営がなされてきた。学校行事が終わるごとに反省し、次の提案では改善できるように取り組んでいる。	学校評価の結果から、改善した内容を共有し、確認しながら取り組んでいく。
⑧研修	複式授業や特別支援教育の研修を深め指導法の工夫を図るとともに新教育課程の学習を組み入れていく。	積極的に研修会に参加して、先進校の実践や専門指導員に学び、児童や学級の実態に応じたきめ細やかな指導を行う。	教頭	各種研究会で学んできた内容を職員会議の後や、職員朝礼の中で職員に還元して、資料も回覧してきたが、十分ではないため、研究会の後や放課後にOJT等の時間を設定して研修内容の還元を努めたい。	【努力指標】 各種研究会で学んできたことがすべての教員の指導力向上に生かされている。	研修会で学んできたことが教員の指導力向上につながったと感じる教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	研修の内容の報告は職員朝礼や職員会議の中で機会を設けて実施しており、教員の指導力向上に役立っている。また校外研修で学んできた内容については資料を回覧するなどして職員室の中で研修してきたことの確認ができた。	今後も職員朝礼や職員会議の際、機会を設けて研修報告を行うとともに、各担当者会で学んできたことは回覧、報告する。
⑨保護者、地域との連携	授業の中にゲストティーチャーとして、保護者や地域の人材を活用し、地域の良さを学び、よりよい生き方を目指す意識を高める。	ゲストティーチャー一覧を活用して、各学年の単元計画や年間指導計画の中にゲストティーチャーを招いた授業を組み入れる。	教頭	総合的な学習の時間や生活科の時間に地域の方をゲストティーチャーに迎え地域の良さを学習することができたが、年間を通じて計画的に実施することができなかった。	【努力指標】 様々な教育活動の場に計画的に地域の方をゲストティーチャーとして招き、地域の良さを生き方に関する授業をすることができる。	ゲストティーチャーを招き、年間3回以上地域の良さと生き方に関する授業を行った学級が A 4学級 B 3学級 C 2学級 D 1学級	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	里山教室や町の達人等、各学年いろいろな教科や活動に地域人材をゲストティーチャーとして積極的に招聘してきた。	来年度以降も活用できるよう、今年度、学校に招聘した地域人材を一覧に加え来年度につないでいく。
⑩教育環境整備	校舎内外の環境整備に努め、安全安心な学習環境の充実を図る。	安全で教育効果を高める教育環境づくりに努める。	教頭	計画的な安全点検を実施し、校舎内外の環境整備に努めている。校舎全体の環境整備については育友会、教育講演会、同窓会などと連携して整備に当たっている。	【努力指標】 安全点検を徹底し、不備な点は早急に対策を行い、安全で効果的な校舎内外の環境整備となるよう努める。	安全で効果的な学習環境の整備に努めることができたと感じる教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	不具合はすぐに修繕し、安全を確保することができた。毎月の安全点検だけでなく、児童、教職員に対して施設、設備の利用について大切に使うよう声掛けする。	毎月の安全点検を徹底し、施設・設備の利用について大切に使うよう声掛けする。

学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの項目でA判定は素晴らしい。来年度は10%数値目標を上げてレベルアップするとよい。 挨拶については「相手より先にあいさつしよう」など、工夫した取り組みができるとよい。 睡眠については保護者への働きかけが重要。家庭との連携を推進する。 非行被害防止講座は、児童、保護者が一緒に聴けたのがよかった。講師により内容が変わるので場合によっては同じ講師でもよい。 	<ul style="list-style-type: none"> 中国との交流は児童の活躍の場があり、とても有意義だった。 ロボレープ世界大会の参加…学校として参加できることは地域としても誇らしい。 ICT教育…市の整備計画に沿ってタブレットの活用を進めていく。 来年度に向けて…地域間交流の取り組みとして金沢三谷小との連携を検討する。
---------	---	--